

サガン・セチェンと『蒙古源流』の編纂

森川, 哲雄
九州大学比較社会文化研究科国際社会文化専攻・アジア社会講座

<https://doi.org/10.15017/8591>

出版情報：比較社会文化. 3, pp.101-115, 1997-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



サガン・セチェンと『蒙古源流』の編纂

森川哲雄*

キーワード：Sayang secen, 蒙古源流, モンゴル年代記

1. はじめに

17世紀から18, 19世紀において、モンゴル人によりモンゴル語で記されたモンゴル史、いわゆるモンゴル年代記が多く編纂されたが、その記述の中心はチンギス・ハーン家の王統史である。そのうちの一つ、『蒙古源流 Erdeni-yin tobci』はチンギス・ハーン家の一員であったオルドス、ウーシン旗出身のサガン・セチェン Sayang secen により1662年に著された⁽¹⁾年代記であるが、モンゴル年代記の中では珍しく、冒頭でその著作の意図が記されている。

巨大な支えである器世界が定まったこと、広大に信仰するものである内の種衆生が完成したこと、大いにすべてを楽しませるものである聖者たちが広まったこと、古えのマハー・サムバディ・ハーン以来順番に、昔、インド、チベット、モンゴルが、昔から如何に盛大になったかを、かいつまんでここに、昔の多くの經典とあわせて私は語ろう(ウルガ本, 1v).⁽²⁾

これによれば、仏教を基礎としてインド、チベット、モンゴルの歴史的展開を記述するのを目的としたという事になる。実際チベット仏教に深く帰依していたサガン・セチェンは、その中でチベット仏教に関して豊富な記述を残しているが、古い時代のものは別として、16世紀後半以降の部分はモンゴル仏教史の重要な史料となっている。また言わずもがなであるが、チンギス・ハーン以来のハーンの事績も重要な柱であり、またグヤン・ハーンの第3子バルス・ボラト以来のオルドス王家の事績、ならびにオルドス王家の系譜を記し、その光栄ある歴史を子孫に伝えようということもその目的であった⁽³⁾。

しかし『蒙古源流』全体を読むとサガン・セチェンがこうしたモンゴルの歴史を書こうとした重要な理由が別にあったと思われる。これについてすでに江実氏が「但し、さきにこの書が1662年に編まれたとしたが、その前年には

順治帝が殂せられ、この年は康熙元年即ち康熙帝が即位された年にあたるのである。従ってこの著者には清朝の御世が次第に隆盛になるにつれ、己が故国の蒙古が古の繁栄をよそにして次第に衰微して行くことに対して一種の感慨の念を覚えて、文に托してその心境を述べたものであらうとも考えられる。」(江実, 1940, p.78)と述べられている。私はこの考えに大筋で同意したいが、ただ江氏の見解からは、サガン・セチェンの著作動機が、チンギス・ハーン家が主権を失ったという現実の中で過去の栄光をふりかえることにあるように受け取れる。しかしそれに対しては若干異論を唱えざるを得ない。

サガン・セチェンが生きた時代はまさにチンギス・ハーン家にとり権力が下降していった時代である。『蒙古源流』によればサガン・セチェンが生まれたのは甲辰年、1604年のことである。この年、チャハル王家のリーグダン・ハーンが13歳でハーンに即位したもののまだ力はなく、むしろ順義王家、すなわちトゥメト王家が繁栄をしていた時代であった。モンゴリアは政治的に分裂してはいたが、ボルジギン氏一族はいくつかの独立政権を形成し、モンゴリアの支配者の地位を維持していた。しかしその後リーグダン・ハーンが行った政治的統一運動はモンゴリアに大きな混乱をもたらし、結局1634年、内モンゴルは満州族の後金国の支配に入って独立を失った。それから約30年、清朝の支配は内モンゴルに一層浸透していく。その様な時代背景のなかで『蒙古源流』は著されたわけであるが、サガン・セチェンは決してそれに絶望していたとは思われないのである。サガン・セチェン自身のとった行動については極めて限られた史料しか残されていない。基本的な材料は彼自身の著作である『蒙古源流』に頼らざるを得ない。そこで本稿ではその著作意図について、そこに記されている多くの事件の記

* 国際社会文化専攻・アジア社会講座

述と、同様の事件についての他のモンゴル年代記の記述とを比較しつつ、あらためて検討してみることにする。

2. 「印・蔵・蒙同源」説話

17, 18世紀に記されたモンゴル年代記はその始めの部分に、記述の長短、精粗はあっても、モンゴルの王統がインドの王統に遡るといふ、いわゆる「印・蔵・蒙同源説」を記している。初めにそれを年代記の中でも最も詳細に記している『蒙古源流』の記述からその概要を紹介してみよう。

すなわちまず『俱舎論』に基づいた、いわゆる器世界 Saba yirtincü の成立、さらに神聖な天人からさまざまな煩悩を持つ人衆生の出現、ついでインドにマハー・サムバディ・ハーン（共戴帝）が現れインドの王の系譜の記述がはじまる。そのマハー・サムバディ・ハーンのサキヤ族に自乳 (Namai köge) という王が現れたのち、1アサンギ、6万4千5百6世代という気の遠くなるような時間が経過して、インドのマガダ金剛座に獅子頬王が生まれ、その子浄飯王から一切義成王子が生まれ、それがマハ・マーヤ妃のお腹に入り、人間界に誕生する。これが釈迦牟尼である。彼は苦行の末悟りを開き、衆生を導いた後、丁亥（紀元前2134）年に涅槃に入った。その仏滅後110年毎に結集が行われたが、仏滅300年後カシュミールにカニシユカ王が現れ、最後の結集を行ったとする（ウルガ本、1v-7r）。

その後インドに7人のザンダ zanda, 7人のバラ bala, 4人のシナ sina と呼ばれる王が生まれ、仏の教えを助けたとする。そのときインドのバドサラ国のウディヤナ王に奇妙な子が生まれた。すなわち、「サイの毛を持ち、白い法螺貝の歯を持ち、手足の指は鷲鳥のようにくっついていて、目は鳥のように下から上に閉じる、非凡な人のしるしをすべて持って」いた。王がこの子を占い師に見せると、その王に障害となる（害をなす）ので殺すように、との占いが出た。そこで王は大臣たちに殺すように命じたが、どんな刃物を使っても殺すことが出来ず、銅の箱に入れてガンジス河に流した。それをヴァイシャリ城の傍らで農作業をしていた老農夫が拾って、その子を育てたと言う。その子が成長して自分の生まれた事情を知って驚き、チベットへと旅に出る（ウルガ本、7r-7v）。

この子はチベットのヤルルン Yarlung の地に天下り、その地の者に素性を尋ねられたとき、マハー・サムバディ・ハーン一族であることと、自分の出自にまつわる話をしたとき、チベットの人々は彼が天人の子孫であることを認め、自らの王に推戴した。それがセゲル・サンダリトゥ王であるという。それから数えて7代目の子孫のディグム(リグム)・ツェムボ Digum bzanbo (グライ・ソビン・アル・アルタン・シレゲトゥ) が王に即位したが、彼は大臣のロン

ナムに殺害される。そのディグム・ツェムボ王にシバグチュ Sibayucu, ボラチュ Boracu, ボルテ・チノア Börte cinu-a という3人の子供がおり、その末子のボルテ・チノアはゴンボ rGöng-bö の地に逃亡したという（ウルガ本、8r-8v）。

『蒙古源流』はこのあとロンナムが1年半チベットの王にあったが、彼は大臣たちに殺害され、あらためてボラチュが招かれて王になったとする。これがチベットの王の祖であるとされ、ついでチベットの王統、仏教の浸透が記述されるが（ウルガ本、8v-11r）、これと関連して、唐の太宗の娘、文成公主が、吐蕃のソンツェン・ガムボ王に嫁いだ経過について、その大臣ウラン・トゥシメル Uran tūsimel が、太宗の難問を次々と解いて、文成公主を獲得したことが記されている（ウルガ本、11v-17v）。その後チベットの吐蕃王朝下での仏教の隆盛とランダルマ王の排仏について記されている（ウルガ本、17v-24r）。

ついで話はモンゴルのことになり、ゴンボの地に逃れたボルテ・チノアがゴンボの地に馴染めず、妻のフーア・マラルと共に「テンギスという海を渡って、東の方に向かって、バイカルという河の岸にあるブルハン・ハルドゥンという山に到着し、バタ Bata という国の人々と会い」、ボルテ・チノアが自分の出自を話したとき、モンゴルのノヤン(王)に推戴されたとする（ウルガ本、24r-24v）。ここにきてようやく『元朝秘史』に記される、モンゴル族の、そしてチンギス・ハーンの祖先とつながるのである。

歴史的事実からすればまことに荒唐無稽な話であり、著者自身がそこまで信じて記したわけではあるまい。このいわゆる「印、蔵、蒙同源説」はロブサン・ダンジン『アルタン・トブチ』(Mostaert, 1952, I, pp. 1-7. Bira, 1990, 1b-4b)⁽⁴⁾、『シャラ・トゥージ』(Shastina, 1957, p. 15-21)、『ジャラグスン・フリム』(Heissig, 1959, Facsimile, 1v-3v)、著者不明『アルタン・トブチ』(p. 3)、『アサラクチ史』(Peringlei, 1960, p. 8) などにも見られる。もちろん記述内容上これらの年代記間には多くの異同があり、中でもインドの王子がチベットに行ってチベットの王になったという顛末についての違いが目される。ロ氏『アルタン・トブチ』は次のように記している。

仏が涅槃にお入りになって千年あまり経った後、マハ・サマディ・ハーン黄金の一族が東の雪国 (=チベット) に広がったことはこのようである。インドのマガダのクシャラ王 Kušala qayan の子、シャルバ Šarba という王の5子の、末っ子は生まれながらに犀の毛を持ち、手、足は真平で、目は下から上に閉じるのである。「これは以前の〔我々の〕一族〔の者と〕同じではない。」と相談して、銅の箱に入れて、ガンジス河に捨てた。(Mostaert, 1952, I, p. 4. Bira, 1990, 3a)

『蒙古源流』では上に述べたように、特異な姿をもって生まれた子のその父はバドサラ国のウディヤナ（モンゴル名 *Uryuyuluyci*）王であり、その子がガンジス河に捨てられたのは父王に害となると占われたためであるとしており、大きく異なる⁽⁶⁾。その他の年代記はその話の構成上『蒙古源流』か『アルタン・トブチ』とほぼ同様の記述を受け継いでおり、その意味で年代記をこの二つの系統に分類することが出来る⁽⁶⁾。

問題はこのモンゴルの王統がインドに起源するという、「印、蔵、蒙同源説」がいつから始まり、それがいかなる理由で唱えられたかということである。この説について言及した陳寅恪はその「彰所知論と蒙古源流」において、

今、小サナン・セチェンの蒙古源流一書について論じれば、それがこの豊累（＝印蔵蒙同源）を致した原因を追求すると、彰所知論に遡らざるを得ない。この論の論主（＝パスパのこと）は梵文に倣って製った所の吐蕃の字母を采り至元国書（＝パスパ字）を作った。

ここにおいて至元国書は遂に吐蕃より再伝した梵文字なのである。その造論もまた天竺、吐蕃の事跡をとり、蒙兀兒史に联接した。ここにおいて蒙兀兒史は遂にチベットより印度に続く通史となった。（陳寅恪，1931，p. 307）

という見解を出した。その理由の一つとして、『彰所知論』の漢訳文中の「始成吉思從北方多音国如鉄輪王。」という文に注目して、「蔵文では多を *mang-po* といい、音を *krol* とする。故に多音をもってモンゴルの訳名とした。その対音の相近きを取ったのである。」（同，p. 308）と述べている。「印、蔵、蒙同源説」が『彰所知論』に起因するという考え方はその後何人かのモンゴル研究者にも受け入れられた（小林高四郎，1941，王徳恩1985a，『蒙古通史』中巻，p. 600）。『彰所知論』はパスパの著作であるが、そうすると「印、蔵、蒙同源説」はパスパにより創りだされたもので、サガン・セチェンもそれを踏襲したということになる。

この見方に関して『蒙古政教史』⁽⁷⁾の訳者蘇魯格 *Sürtüg* 氏は反論を行った。その理由を簡単に紹介すると、氏はチベットからモンゴルの王統につながる箇所、グライ・ソビン・アル・アルタン・ハーン（チベット名リクン（ディグン）・ツェムボ）が大臣ロンナムに殺害され、その3人の子がゴムボの地に逃れたという話があるが、これはすでに『敦煌本吐蕃歴史文書』の「贊普伝記」にその原型が記されていること（王堯他，1983，p. 123）、さらに14世紀に編纂された『王朝明鑑』⁽⁸⁾にもそれと同じことが記されていると指摘した（蘇魯格，1989，pp. 4-6）。

蘇魯格氏はさらに陳寅恪がその説の重要な根拠にした『彰所知論』の上記に示した漢訳文に対する理解が全くの誤解であるとした。まず漢訳文の原文は「始成吉思從北方王、

多音国如鉄輪王」であり、「王」の字が書かれていること、多音国はチベット語の音を示したのではなく、「多種不同語源的人組織的国家」「許多不同語種的地方」という意味の漢語であるとした。そしてモンゴルに関連する『彰所知論』の全文を紹介し、そこには全く「印、蔵、蒙同源」は認められないとされた（同，pp. 2-3）。これは十分説得できる見解である。また氏はこの「蔵、蒙同源説」について、「“蔵、蒙同源”説は決してチベット典籍から出たものではなくて、蒙古ラマの作り事（杜撰）である。けだし蒙古民族が仏教に帰依したのは、これを間接的にチベットより受けたからである。」（蘇魯格，1989，p. 6）と述べている。

『フウランテプテル』にもリクン・ツェンボ *Gri khung btsan po* がその大臣ロンガム *Lo ngam* に殺されたこと、その3人の子のうち、チャチ *Bya khri* が王となり、兄シャチ *Çakhri* はコンポの、弟ニヤチ *Nya khri* はニャンポの君主となってロンガムを征服したと記されている（稲葉、佐藤，1964，p. 90）。モンゴル年代記に見られる、リクン・ツェムボの3人の子のうち、末子のボルテ・チノアがゴムボの地に逃れた、というのはこれらの記述を利用し、置き換えたものに過ぎない。もちろんチベット年代記にはインドの王統や、チベットの王統、モンゴルの王統を章毎に記述することはみられる。例えば『フウランテプテル』、『テプテル・ゴンポ』などでは、インドの王統、中国の王統、吐蕃の王統とならんで、モンゴルの王統が記述されている（稲葉、佐藤，1964，pp. 76-88，郭和卿，1985，p. 36）。ただしそこにはモンゴル年代記のように、インドの王統がチベットにつながり、さらにチベットの王統がモンゴルの王統につながる、というような記述はもちろん見られない。このように「印、蔵、蒙同源説」は14-15世紀に書かれたチベット語史料には見られず、その意味でそれが後世のモンゴル人の手になることは事実であろう。

同じように比較的早くモンゴル語で記された、一種の仏教史に、*Ciqula kereglegci tegüs udq-a-tu šastir orosibai*⁽⁹⁾ という史料がある。この史料は『蒙古源流』の編纂の際に利用した史料の一つとも言われている（Heissig，1959，p. 100）。ここにも簡単にインドの、共戴帝（*Olan-a ergügdegsen qayan*）より仏陀に至る王統、ついでチベットの最初の王、*Küjügün sandali-tu qayan* から *Usun sandali-tu qayan* までの王統、その後モンゴルのチンギス・ハーンより順帝 *Toyon temür qayan* までの王統が記されているが（Heissig，1959，Facsimile，37v-41r）、ここには、のちに編纂されたモンゴル年代記のように、チベットの王統がインドのそれにつながるとか、モンゴルの王統がチベットのそれにつながるとかというような記述は見られない。ハイシツヒ氏の研究では、その編者の名前から、1587-1620年の間に編纂されたものという（Heissig，1959，

p. 34). この他に17世紀はじめ、まだ後金国(清朝)に支配される以前に編纂されたと考えられる、通称『アルタン・ハーン伝』にも、チンギス・ハーンとチベットの王統とのつながりは記されていない⁽¹⁰⁾。このことは「印、蔵、蒙」、特に「蔵、蒙」同源説が時代的にこれより後の、恐らく内モンゴルが清朝に支配された後、あるモンゴル人により創り出された話であるということ推定ならしめる。

では一体誰によって最初にこの考え方が提唱されたかであるが、もちろんそれを特定することはできない。これについて蘇魯格氏は「印、蔵、蒙同源」の説は『アルタン・トプチ(黄金史綱)』に初めて見られ、『蒙古源流』で集大成されたものだという見解を出された(蘇魯格, 1989, p. 3)。これは甚だ魅力的な見解であるが、この説が成立するには前提が必要となる。すなわち蘇魯格氏の言う『アルタン・トプチ』とは、いわゆる著者不明『アルタン・トプチ』を指していると考えられるが、その場合、それが『蒙古源流』より早く成立している必要がある。『蒙古源流』が1662年に編纂されたということは大方の支持するところである。他方、著者不明『アルタン・トプチ』は、編纂年は分からないが、一般的にリクダン・ハーンの治世中、すなわち17世紀前半であるとされている(例えば Bawden, 1955, p. 13, 朱風・賈敬顔, 1985, p. 1, 包文漢・喬吉, 1994, p. 36)。そうであれば蘇魯格氏の見解は問題が無い。

しかし著者不明『アルタン・トプチ』の17世紀前半成立説に対する反論もあることにふれておかねばならない。例えば著者不明『アルタン・トプチ』とロ氏『アルタン・トプチ』の関係について、「前者は後者に依っている」(Heisig, 1959, p. 76)とか、前者は後者の節略本である(岡田, 1965, p. 21)という見解がある。特にハイシツヒ氏は著者不明のものとしてロ氏『アルタン・トプチ』の記述を比較し、前者が後者より簡略化されていることを論証した(Heisig, 1959, pp. 77-79)。またこのロ氏『アルタン・トプチ』は最近の研究では17世紀末、あるいは18世紀初頭に編纂されたという見解が有力であり、そうなるなら著者不明『アルタン・トプチ』は『蒙古源流』よりはるか後に編纂されたことになり、上の蘇魯格氏の見解は成立しなくなる。

これとともに著者不明『アルタン・トプチ』の一部の写本にはその初めの所に、ブルニ親王 Burni cing vang までのモンゴルの王統が記されている。このブルニが親王になったのは康熙8(1669)年であり、この系譜が原著者により記されていたのであれば、その成立は当然それ以後のことになる。ところがこの王統の系譜は文のつながりにおいてやや理解し難い箇所記されており⁽¹¹⁾、そのためそれは後人の挿入であるとみなされて、いくつかの『アルタン・トプチ』の注釈文では排除されていることが多い(小林1941, p. 7, 賈敬顔・朱風1985, p. 3)。事実、いま見

ることの出来る『アルタン・トプチ』のテキストにはこのブルニ親王までのモンゴルの王統が記載されていないものがある⁽¹²⁾。このことは『アルタン・トプチ』の写本研究をあらためてより詳細に行う必要があることを意味しているが、ここではこれ以上触れないことにする。その意味でここでは蘇魯格氏の見解は一つの見方ではあるがそれを受け入れるということについては今のところ留保しておく。

上の問題はともかく、「印、蔵、蒙」、「蔵、蒙」同源説の出現の事情については、やはりそこには17世紀という時代を考えねばなるまい。上に触れたように、Ciqula kerelegci や『アルタン・ハーン伝』が編纂された時代は、モンゴルがまだ独立を保っていた時代であり、リクダン・ハーンの活動など、チンギス・ハーン家内部にごたごたが起きてはいたが、それでもチンギス・ハーン家のモンゴリアにおける優越性はまだ揺るぎないものがあった。その意味で Ciqula kerelegci や『アルタン・ハーン伝』に「印、蔵、蒙同源説」が出て来る必然性はない。しかし1634年、内モンゴルは満州族の支配する後金国(清朝)の統治下に入り、その支配はますます強化された。このことは必ずや一部のチンギス・ハーン家の者に危機感を呼び起こしたに相違ない。この頃『カンジュル bKa h h gyur』のモンゴル語訳はすでに行われており⁽¹³⁾、チベット仏教、仏典に関する知識はモンゴル人ラマや知識人にかなり浸透していたはずである。まさにここに、恐らくチベット仏典に精通していた誰か(あるいは複数の者)によって「印、蔵、蒙同源説」が生み出されたのである。その意図はチベット仏教の隆盛とチンギス・ハーン家の危機という時代を背景にして、チンギス・ハーン家の祖先をチベット、さらにはインドの王統につなげることにより、その権威を維持しようとするにあった。この考え方が『アルタン・トプチ』の作者やサガン・セチェンに受け入れられ、その著作の冒頭に記されたと思われる。このことに触れて周清澍、額爾特尼・巴雅爾も「またボルジギン氏の祖先が洪荒開闢以来君主であり、この種の地位が動かないものであることを言っている。」(1981, p. 159)と述べているのに同意したい。

3. チンギス・ハーン中国支配に関する記述

『蒙古源流』には他のモンゴル年代記には記されていない独特の記述が見られるが、その一つは、チンギス・ハーンが明確に中国を支配したと記していることである。すなわち32歳の癸丑(1193)年にタタルのイス Yisü, イスゲイ Yisügei (イスゲン Yisügen) 姉妹を妃にしたと記した後、「それより〔チンギス・ハーンが〕中国を支配下に入れたこととはといえば、」として、漢以降、宋にいたる帝紀(実はその大半は唐の帝紀であるが)を記す(ウルガ本 33r-35

r). そして最後に

それより6代経って、趙太祖王という者の御代の丙辰(956)年より102年〔経った〕丁酉(1057)年に、中国のマンジュ皇王 Manzu qong vang という者が政権を取った。それより9代経った、戊戌(1058)年より137年の甲寅(1194)年にモンゴルのチンギス・ハーンが中国のマンジュ・アルタン・ハーン(金皇帝)を追い出し、政権をとって、その33歳の甲寅(1194)年に、赤い国、八十万中国の十三州を支配して、ダイミン・ストゥ・ボグダ・チンギス・ハーン Dayiming sutu boyda Cinggis qayan とて有名になった。(ウルガ本, 35r)

と記し、あたかもチンギス・ハーン自身が中国を征服したかのように記している。もちろん周知のように歴史的事実は、1211年にチンギス・ハーンは初めて金朝遠征を行い、1215年にはその首府中都を陥落させ、さらに金朝の領土を広範囲に占領したが、完全には征服していない。金朝を征服したのはその子オゲデイ治世の1234年のことである。

こうした歴史的事実に関する問題はともかく、注目されるのは、「(チンギス・ハーンが)中国のマンジュ・アルタン・ハーンを追い出し、その政権を取った」という記述である。常識的なことであるが、『蒙古源流』が著された1662年は、清朝の支配者が自己の民族名を女直 jušen (jürclid) からマンジュ Manju (満洲) に改めてからすでに久しい。この民族名の改称は jušen (女直, 女真) が明朝では「東夷」の一つとみなされていたことを嫌ったためである。その意味でもはるかに古い金朝の支配者に対してマンジュという民族名をつけて表現することは適当ではない。しかし敢えてここでチンギス・ハーンが「マンジュ・アルタン・ハーン」を追い出した、と記しているのは、著者が信仰しているチンギス・ハーンの輝かしい事績を示すと共に、チンギス・ハーン家は本来正当な支配者であるにもかかわらず、モンゴリアは清朝の支配下に置かれているという、時の政権に対する嫌悪感の表れともとれるのである。当然この部分は以下に示すように清朝政権の忌避にふれる表現であった。

周知のように『蒙古源流』には数多くの写本、版本が存在するが、その中に通称『殿版』やそのもとになった『故宮抄本』がある。これらのテキストの編纂の経緯は、すでに先学のふれているところであり、また関連して筆者も述べたことがある(森川, 1990b)。これもすでに触れたところであるが、乾隆帝の命令により、外モンゴル、サイン・ノヤン部のチェンゲンジャブから献呈された『蒙古源流』、すなわち『青吉斯汗世系記載档案』のもとになった『白い歴史』と、故宮抄本、殿版の内容を比較すると、後者ではかなりの記事が削除されている(森川, 1990b, pp.

515-519)。それは『蒙古源流』の随所に清朝の忌避する記述があるためである。先に示したチンギス・ハーンが「マンジュ・アルタン・ハーンを」中国から追放したという記述も⁽¹⁴⁾、清朝の立場からは当然認められるものではない。この部分を『ウルガ本』と『故宮抄本』、『殿版』、ならびに『白い歴史 Cayan teike』と比較してみると次のようである。(x印はそれぞれ対応する文が無いことを示している)

『ウルガ本』 それより9代経つとき、戊戌年より137
 『白い歴史』 それより9代経つとき、戊〔戌〕年に、137
 『故宮抄本』 それよりxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
 『殿版』 それよりxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
 『ウルガ本』 年の甲寅年にモンゴルのチンギス・ハーンは
 『白い歴史』 年の甲寅年にモンゴルのチンギス・ハーンは
 『故宮抄本』 xxxxxxxxxxxxxxxxxxxチンギス・ハーンは、
 『殿版』 xxxxxxxxxxxxxxxxxxxチンギス・ハーンは、
 『ウルガ本』 xxxxxxxxxxx 中国のマンジュ・アルタ
 『白い歴史』 xxxxxxxxxxx 中国のマンジュ・アルタ
 『故宮抄本』 青い?大兵を連れて、中国のxxxx アルタ
 『殿版』 青い?大兵を連れて、中国のxxxx アルタ
 『ウルガ本』 シ・ハーンを追い出して (kögejü yaryan),
 『白い歴史』 シ・ハーンを追いだして (kögejü yaryan),
 『故宮抄本』 シ・ハーンを追い出して (kögejü yaryan),
 『殿版』 シ・ハーンを送りだして (kurgeju yaryan),
 『ウルガ本』 政権を取って (35r)
 『白い歴史』 政権を取って (54b)
 『故宮抄本』 政権を取って (III-29r)
 『殿版』 政権を取って (III-27a-b)

ここに比較したように、「マンジュ」の語が『故宮抄本』、『殿版』で削除されているが、もとの『白い歴史』には記述されている。しかしチェンゲンジャブの立場から、チンギス・ハーンが「マンジュ(満洲)」を中国から追い出した、などという表現をそのままにしておくことは不可能であったから『青吉斯汗世系記載档案』では削除して提出したのであろう。ただサガン・セチェン自身はこうした表現を忌避する気持ちは全く無かった。なお上に示した文の語彙の一部に微妙な表現の違いがあることが分かる。『白い歴史』、『故宮抄本』では「アルタン・ハーンを追い出して kögejü yaryan」としているのに対し、『殿版』は「アルタン・ハーンを送りだして kurgeju yaryan」としている⁽¹⁵⁾。モンゴル文字では「追って kögejü」と「送って、届けて kūrgejü」の語彙は形が似ていて後者は前者の語形にr字を入れればそうなる。これは単純に刻字者のミスなのか、『殿版』の編者の意図、つまり清朝の支配者に対する配慮が働いていたのかは明かでない。

4. 『蒙古源流』に見られるボルジギン氏「天命説」「不可侵的存在」の主張

いわゆる『元朝秘史』の冒頭に、「上天の命ありて生まれる灰白色の狼ありき」とあるように、チンギス・ハーン家の祖先が「天命」をもって生まれてきたとされていることは周知の通りである。しかし『元朝秘史』には意外に「ボルジギン」の名が出てこず、わずかに一箇所だけである⁽¹⁶⁾。しかもそこには「天命を受けたもの」という表現は見られない。他方『蒙古源流』には随所に「ボルジギン」の名が記され、更にそこには「天命のある」という表現や、様々な事件の中でボルジギン氏が「不可侵」的存在であるという表現が見られる。そこでここでは『蒙古源流』に見られる具体的な記述の例を示し、それと他の年代記の記述とを比較しつつ、サガン・セチェンの心情を探ってみたい。

1) ホンギラトのデイ・セチェンがテムジンの妻としてその娘ボルテを与えたこと

『蒙古源流』は以下のように記す。

そこでイスゲイ・バートル Yisügei bayatur は、「私はこの自分の子供に姻戚を求めにゆくのである。」と言えば、デイ・セチェン Dei secen は「この夕べ私は白い隼が私の手に留まった夢を見た。見ればあなた方のボルジギンのスルデ süldé (霊神) であった。我々は昔から今まで見目麗しい娘たちを大いなるボルジギン氏に妃となし、性格の良いその娘たちを天命のあるボルジギン氏に妃となしてきた。今、私のボルテという名の、9歳のただ一人の娘がいる。それをこのあなたの子供に与えよう。」と言ったとき、(ウルガ本、26v)

とある。ここで注目される表現は「天命(天運)のあるボルジギン氏 jayayatu Borjigid」としていることである。「天命(天運)のある」というのは、ボルジギン氏は「天の命」を受けてモンゴリアを支配する運命にあった⁽¹⁷⁾、という意味である。これに対応する『元朝秘史』の文は次のようである。

イエスゲイ・バートルが〔それに答えて〕申すよう、「このわが子の母方のオルクヌウト〔族〕の民の所で、娘をもらおうとてやって来たのですが。」と言った。〔すると〕デイ・セチェンが申すよう、「イエスゲイ縁者よ。私はこの夕べ、〔ある〕夢を夢みたのです。白い鷹が、日と月の二つを掴んで飛んで来て、わが手の上に落とし〔ていっ〕たのですよ。〔中略〕われらオンギラトの〔国〕民は昔の日より外孫女の顔色 乙女の容姿〔よく〕ありて国〔土〕をば取り争わず皇帝となりたる汝の御輦に乗らせ

黒ラクダに引かしめて

駆らせゆきて 后妃の御座に

ともどもに並び座らせん〔中略〕

イエスゲイ縁者よ。わが家にお立ち寄り下さい。私の娘はまだ幼いが、縁者よ、〔どうか一目〕見て〔やって〕下さい」

と言って、デイ・セチェンが己が家に案内して、馬を降りた。(村上、1970、pp. 87-88)

『蒙古源流』に対応するこの『元朝秘史』の文はかなり長いので一部省略したが、『元朝秘史』は『蒙古源流』のようにここではボルジギンの名も、またそれが「天命のある」ものであるということも記していない。もちろん『元朝秘史』には、上に記されるように、イエスゲイの所属するキヤト氏を、「皇帝(ハーン)となりたる汝の御輦に乗らせ」、「駆らせゆきて 后妃の御座に」と位置づけている表現があることは否定するものではない。

2) テムジンがタイチュートに追われてソルハン・シラ(トルハン・シラ)の家にかくまわれた話

『蒙古源流』では次のように記される。

それよりあちらこちら探して行くときに、急流に隠れて横たわるのを、スルドゥスのトルハン・シラ Torqan sira が見て、「以前、わが子チラグン Cilaγun とチャムバイ Cambai を可愛がってくれた。」と考へて、「人の子よ。お前が横たわっているのはよろしいぞ。私は森を探そう。」と言って行った。夜になって「良い心を持った人である。」と、トルハン・シラの家に来た。その時チラグン、チャムバイの二人の子が言うには、「潜り込むために来たヒバリに繁みは隠れ家になるというのに、追われて? 来た天人の後裔 tenggerlig-ün ür-e, ボルジギンの彼を、正直に世話してよく守らなければ、我らに純粋であることは? 何の役にたつか。」と言って、鎖を斧で壊して、羊毛を積んだ車に座らせて隠した。(ウルガ本、27v-28r)

これに対応する『元朝秘史』の記述は以下の通りである。

水溜りに臥せているところをスルドス〔氏〕のソルカン・シラがちょうど通りかかって、〔テムジンを〕見て申すよう、「まさにかような才あるばかりに、『その眼に火あり、その面に光ある』とて、タイチュートの氏人にかほどまでに妬まれているのだぞ、お前は、そのように〔しばらく〕臥していなさい。わしは〔他人には〕告げぬから。」と言って、〔そのまま〕通り過ぎ〔て行っ〕た。(中略) その家の中にはいると、ソルカン・シラは〔驚いて〕「己が母や弟たちを尋ねて行けとわしは言わなかったか。どうして又、〔こんな所に〕やって来たのか、お前

は。」

と言った。チンバイ、チラウンの二人の子供が語るには、

「雀を龍多児が叢の中に追い込んだら、叢は[それを]救ってくれるものですよ。今、[こうしてせっかく]われわれの所に[逃げ込んで]来た者に、どうしてそのように[すぎないことを]言うのですか。」

とて、父の言葉を喜ばず、手械をほどいて、火で焼いて、後ろに羊毛を積んだ車の中に乗らせて、(以下略)

(村上, 1970, pp. 125-28)

テムジンがソルカン・シラの家族によって救われたという点では『蒙古源流』も『元朝秘史』も同じであるが、後者にはやはり「天人の後裔であるボルジギン」という表現は見られない。ロ氏『アルタン・トプチ』は『元朝秘史』の記述を踏襲しており (Mostaert, 1952, pp. 40-42. Bira, 1990, 19a-20a), この『蒙古源流』の表現がサガン・セチェンによって付加された可能性がある。

3) アジャイ・タイジの出自

アジャイ・タイジは『蒙古源流』ではタイスン・ハーン、アクバルジ・ジノン、マンドゥグリ・ハーンという、15世紀半ばから後半のモンゴルで政治的に重要な役割を演じた3人の父親として登場する⁽¹⁸⁾。『蒙古源流』はこのアジャイ・タイジについて以下のような記述をしている。

まさにその年の乙未年にウゲチ・ハシユハ Ügeci qaš-q-a は邪悪なことを考え、先の恨みによりゴーハイ・ダイウ Fooqai dayiu の子、バトラ・チンサン Batula cingsang を殺した。そこで直ちに四オイラトが会盟をした。会盟をしに行った3人が戻って近づいてくる道の傍らで、アストのアルクタイ Aruγtai が牛糞(アルガリ)を拾って行きながら、「お大臣様よ。あなたがたの会盟の話題は何でしたか。」と問えば、「賢者が一度首に籠をかけて、大いなる政権のために苦しんでいる、と言ったようだ。」と悪口を言って笑って、このように言うには、「刹那 Qoromqan という名の城を建てることになった。黄色の斑点のある牡牛をたたくことになった。アジャイ・タイジ Ajai tayiji をハンに推戴することになった。アルクタイという子をタイシにすることになった。」と言えば、彼らが過ぎ去ったあとで、アルクタイはその籠を外して[地面に]置いて、「お前の言葉ではない。天のお言葉であるぞ。」と言って、「平民である私には何かあろうか。アジャイ・タイジは天人の後裔 tngri-yin üre である。天なる父、汝こそ知れ。」と言って、前方に[向かい]天に叩頭したのであった。(ウルガ本, 52r-52v)

これに対しロ氏『アルタン・トプチ』、著者不明『アルタ

ン・トプチ』、『アサラクチ史』などにはこのような記述は見られない。他方『シャラ・トゥージ』にも上記の『蒙古源流』のような文は全くみられず、それらを節略して次のように記しているだけである。

まさにそのウゲチ・ハシユハは死んだ。ウゲチ・ハシユハの子エセク Esekü はバトゥラ・チンサン⁽¹⁹⁾のサムル・グンジ Samur günji を娶った。ゴーア・ビージ Γoo-a biiji とアジャイ・タイジをアルクタイ・タイシが使って暮らした。そこでサムル・グンジはオルジェイトウ・ゴーア・ビージとアジャイ・タイジをアルクタイに隠れて、その里方のモンゴルに遣わした。「エセクは死んだ。オイラトは混乱[状態]になった。エジェンである自分の父に叩頭して、こちらに出陣して来い。」と遣わした。エジェンの後裔、アダイ・タイジは残ったモンゴルを支配していたのであった。アダイ・タイジはオルジェイトウ・ゴーア・ビージ Öljei-tü γoo-a biiji を娶り、その35才の時にハン位に即いて、アルクタイにタイシの称号を与えたのち、アダイ・ハーン Adai qayan とアジャイ・タイジ、アルクタイ・タイシは3人で出馬して、ジラマン山で四オイラトを襲撃して、戦利品となし取って戻ったとき、バトゥラ・チンサンの子、バハム Baqamu を捕らえて戻って来たとき、アジャイ・タイジと姉のサムル・グンジは慈しんだのであった。(Shastina, 1957, pp. 61-62)

ここには、アジャイ・タイジ(アダイ・ハーン)を「天人」化する表現は全く見られない。アジャイ・タイジを「天人化」する表現はやはり『蒙古源流』だけに見られるのである。

4) トゴン・タイシがハーンになろうとして失敗し死亡したこと

15世紀前半、オイラトのトゴン(トガン)・タイシはモンゴル高原に勢力を伸ばし、ライバルであったアラク・チンサンと争ってこれを倒し、モンゴル全体の実権者となった。明側の史料では脱脱不花(タイスン・ハーン)を傀儡の王(ハーン)にし、自らは太師として実権を振るったとされるが、彼がハーンになろうとしたことについて、『明史』巻328、瓦剌伝に記されているが、『明実録』にはそのような記述は無い。これに関してモンゴル側の伝承では彼はハーンになろうとしてオールドスにある八白室に行き、即位の儀式を行ったものの、チンギスの霊の報復を受けて死んだとされている。これについて『蒙古源流』は次のように記す。

それからトガン・タイシ Toyān tayisi は mirasan? の良い栗毛馬に[乗って八白室の]エジェンのオールドの尖塔を3度回ってぶつかって、何度も切りつけて、「お前はストウsutuの身、チャガン・ゲル Cayān ger であるなら、私はスタイ Sutai の後裔、トガンである。」

と言ったとき、四十と四の貴族たちや人衆たちがこのように言い合うには、「このエジェン・ボグダ（聖主）は単にモンゴルの主人だけではないぞ。総じて五色と四つの異国をその力に入らせた（全世界を支配した）ハン、帝釈天の子であるぞ。彼には面倒な妨げのような？振舞いがあるぞ。」と言いつつ、「お前の言葉、お前の振舞いは甚だしき過ちとなった。エジェン・ボグダに詫びて叩頭して、自分の命を乞わねばならない。」と言ったけれども認めず、「私は自分の命を〔スタイ以外の〕他の誰に乞うのであろうか。今や全てのモンゴル国は私のものになった。私は以前のモンゴルのハンのようにハンのの称号をとろう。」と言ってエジェンの所に供物を置いて、戻るときにエジェンの黄金のエビラがバシッと音がするとき、〔みんなが〕その傍らを眺めてみれば、まん中の目にある一本の長弓が震えて動いていた。まさにそのときトゴン・タイシの鼻と口から血が流れて慌てふためいているときに、服を脱がせて気をつけさせているとき、二つの肩甲骨のちょうどまん中に矢の縫い糸のような傷が出ているのをみんなで見つめた。それより〔八白室の〕エジェンの籠のの所に行つて見れば、まん中の目にある一本の長弓の鉄の矢じりと矢はずに血があるのを見て、四十と四はみんな、「エジェンはお気に召さなかったのだ。」と言いつつ。（ウルガ本、53v-54r）

このように『蒙古源流』ではチンギス・ハーン家の者でないトゴン・タイシがハーンに即こうとしたことや、エジェン *ejen*（御主人様の意。チンギス・ハーンのこと）と八白室（チンギス・ハーン廟）に対する彼の無礼な振舞いが、「四十と四」、すなわち当時のモンゴルとオイラトの人々に厳しく批判されたとする。他方ロ氏『アルタン・トプチ』には関連する記述はあるが、非常に簡略になっている。

モンゴルの政権を取った後、トゴン・タイシはトゴン・タイシを抱いて、エジェンの八白室 *Naiman cayan ger* に叩頭して、「ハン位を取ろう」と来て、叩頭してハンになった。トゴン・タイシはハンになった。トゴン・タイシはエジェンの御神酒に酔って、「お前がストウ・ボグダ *Sutu boyda* であるなら、私はスタイ・ハトゥン *Sutai qatun* の後裔である。」と大口をたたいてエジェンの尖塔を叫びつつ何度も叩いて打った。それより戻つて出ようとする、トゴン・タイシの鼻から血が出て、〔トゴン〕自分の馬のたて鬣を抱いて搦んで、「一体どうなったのか。」と〔言った。〕見るとエジェンの籠のの目に差し込んだ羽毛のついたかぶら矢が血塗れになって動いているのをみんなで見つめた。（Mostaert, 1952, II, pp. 146-48. Bira, 1990, 150b-151a）

これに対し『シャラ・トゥージ』はトゴンがハーンにな

ろうとしたことは記していない。

トゴン・タイシはエジェンのチャガン・ゲル（〔八〕白室）を回つて、切りつけて、「お前はストウ *Sutu* であるなら、私はスタイ *Sutai* の後裔〔である。〕」と言つた。〔すると〕エジェンのエビラにある矢〔から〕音が出て、トゴンの鼻、口から血が出た。（Shastina, 1957, p. 63）

『アルタン・トプチ』や『シャラ・トゥージ』の記述からは、トゴンの死は八白室の報復を受けたためであるということを受け取れるが、『蒙古源流』のように、「エジェン・ボグダに詫びるべきだ」とか「エジェンはお気に召さなかったのだ」とかいうような、神として祀られているチンギス・ハーンを前面に立ててトゴンの行為を批判する表現はみられない。すなわちこの批判はサガン・セチェン自身の言葉なのであろう。

5) タイスン・ハーンの死

『蒙古源流』ではタイスン・ハーンはアジャイ・タイジの長子として壬寅（1422）年に生まれ、己未（1439）年に即位、14年在位し壬申（1452）年に死んだと記される（ウルガ本、54v, 56r）。タイスン・ハーン（脱脱不花王）は明の史料にもかなり詳細に記されているが、オイラトの実力者トゴン・タイシに擁立され、トゴンの死後実権を握つたその子エセン・タイシとも協調していたが、後対立し、その逃亡途中に殺害されたという。またその死亡年は明側の史料では1451年のこととされる⁽¹⁹⁾。このタイスン・ハーン殺害について『蒙古源流』では次のように記されている。

〔前略〕……と言つて、タイスン・ハーン *Tayisun qayan* は野生の浅黄色の馬に乗つて逃れて、ケンテイ山 *Kentei qan* を目指し、ケルレン河を横切り逃れて行つた。〔タイスン・ハーンは〕先にゴルラトのチャブタンという者のアルタガルジン *Altayaljin* という娘を〔妃としたが、離婚して〕捨てて戻つてやつたのであつた。そこで逃れていくうちに、そのゴルラスのチャブタン *Cabtan* に出会えば、父のチャブタンは、「恨みある者と峡谷の上で会つたということだ。彼を殺そう。」と言つたときに、娘は、「過ちは私の方にありました。ボルジギンに悪事をなせば罰が当たります。いま彼が苦しんでいるときに助ければ、いつか〔我々にも〕必要となる〔ことがある〕ではないか。」と諫めたけれどもきかず、殺害した。（ウルガ本、56r）

同様の事件をロ氏『アルタン・トプチ』は次のように記している。

……タイスン・ハーンはわずかな従者と共にケルレン〔河〕に逃れた。先にチャブタンの娘、アルタイ・ハトゥン *Altai qatun* が農民 *taracin* のハルチャガイ

Qalçayai と関係を持ったとしてハルチャガイを殺して、後の耳、鼻を切って戻した、〔その〕妃の実家のチャブタンのところに向い行くとき、(中略)ハーンはチャブタンの所に至って、出た(戻った)妃のところを下馬した。チャブタンが言うには、「陰山 Qarayun-a の北は以前暖かかった。今どうして寒くなったのか。アルタイ山の北は以前暖かかった。今どうして寒くなったのか。アルタガナ Altayan-a なる私の娘自身は以前冷たかった。今どうして暖かくなったのか。草が悪いと移って行った〔もとの〕牧地に下馬するであろうか。色〔欲〕が無いといて捨てた女を娶るであろうか」(中略) オルチンニ・チキルのところで申の年にタイスン・ハーンはゴルラスのチャブタンの手にかかりおなくなりになった。(Mostaert, 1952, II, p. 139. Bira, 1990, 146a-146b)

ここにはタイスン・ハーンがその妻アルタイ・ハトゥン(アルタガナ)を実家に戻した理由は示されているものの、『蒙古源流』のように、その妻の言葉は全く記されていない。また『シャラ・トゥージ』のこれに関連する記述は次のようである。

…アクバルジ・ジノンはオイラトのエセン・タイシと一緒に、その兄タイスン・ハーンと敵対し追ったときに、〔タイスン・ハーンは〕ケンテイ山に向い行くうちにゴルラスのチャブタンに出会うときに、チャブタンは先に〔タイスン・ハーンが自分の〕娘のアルタガルジン捨てたのだった、とタイスン・ハーンを殺害した。(Shastina, 1957, p. 64)

ここでもチャブタンがタイスン・ハーンを殺害した理由と経過が簡単に触れられているだけで、「ボルジギン氏に害をなせば罰が当たる」というような、ボルジギン氏を「神聖にして不可侵の存在」とあるというような表現は見られない。これと関係する記述が次の6)に見ることが出来る。

6) チャブタンの殺害とモラン・ハーンの即位

タイスン・ハーンを殺害したチャブタンの末路について、『蒙古源流』は次のモラン・ハーン Molan qayan の即位と関連づけて次のように記している。

そこで先にタイスン・ハーンのアタガルジン・ハトゥンを〔里方に〕戻してやったときに、3歳の男の子を連れて〔行ったが〕、〔その死後?〕あとに残ったモラン・タイジという者は丁巳(1437)年生まれで、〔その〕16歳〔となったの〕をチャブタンが「自分の娘の子だ。」と生かして暮らすうちに、同じその年にチャブタンを殺してゴールラト Poorlad のホブチル Qobcir という者が〔モラン・タイジを〕自分の家で使っているとき、その国に突然大疫病が起こったので、占い師に尋

ねると、「ボルジギンに悪事をなした罰である。」と言ったので、「これが真実ならそうであるぞ。」と言い合つて、恐れて、ケムジグート Kemjigid のダガタイ・タイブ Dayatai tayibu という者により、〔モラン・タイジを〕オンリグートのムラハイ王 Mulaqai ong のところに届けてやった。それからみんなで、「大いなる国の政権をあなたが定めたのだ。今やあなたがハンに即きなさい。」と言ったとき、そのへそのある黄馬に乗らせて、その金の金剛杖を〔地面に〕突き立てて、〔八白室の〕エジェンの前に連れて行って、その17歳の癸酉(1453)年にハーン位の即かせた。(ウルガ本, 59v)

5) において「ボルジギンに悪事をなせば罰があたる」と予言されたことが、ここにおいて「疫病が起きた」ことによって現実のものとなったとされる。これに対してロ氏『アルタン・トプチ』はモラン・ハーンの即位について、『蒙古源流』とは微妙に違う記述をしている。

タイスン・ハーンを殺害するとき、モラン・タイジ Moolan tayiji をチャブタンは自分の娘の子 jige であるとして殺さなかった。そののちチャブタンからモラン・ハーンをケムジグートのタガタル・タイボ Tayatar tayibu, ゴルラトのホブチル・モロタイ Qobcir molotai の二人が、大国(モンゴル)の境界に届けて、人に与えた。その人はマグリハイ王 Mayuliqai ong に届けた。オンニグートの大臣は、マグリハイ王に「大国の政権を定めました。あなたがハンの位に即きなさい。」と言った。マグリハイ王が言うには、「ハンなる我がエジェンの後裔がいないのではない。この身も、〔私の〕後裔も〔ハンになることは〕ふさわしくない。」と聞かないで、マグリハイ王はモラン・ハーンにへそのある美しい馬に乗らせて、自分の金剛を突き立てて、7歳〔のモラン〕を西の年に大位に即かせた。(Mostaert, 1952, II, p. 151. Bira, 1990, 153a-153b)

すなわち最初ハーンに推挙されたのはマグリハイ(ムラハイ)王であったというのである。『アサラクチ史』は一部省略はあるものの、ロ氏『アルタン・トプチ』とほぼ同様の記述をしている(Peringlei, 1960, pp. 54-55)。モラン・ハーンの即位についての経緯は、『蒙古源流』よりは『アルタン・トプチ』の方が理解し易い⁽²⁰⁾。しかし『蒙古源流』以外の他の年代記にタイスン・ハーンを殺害後、モンゴルに疫病がはやったことや、その原因を「ボルジギン氏に悪事をなした罰である」というような表現はみられない。⁽²¹⁾

7) ウルス・ボラトの殺害

ダヤン・ハーンがモンゴリア支配の過程で自分の息子を各地の族長の養子としたり、分封のかたちで様々な集団(万戸, オトク)の長として送り込んだことはよく知られてい

る。その一貫として、第2子ウルス・ボラトを右翼部を監督するジノンとして送り込んだところ、右翼部の一部の実力者の反発を受けて殺害されるという事件が起きた。これをきっかけとしてダヤン・ハーンは右翼部遠征を行い、モンゴリアの政治的統一を完成することになる。このウルス・ボラト殺害事件について多くのモンゴル年代記は当然記しているが、『蒙古源流』の記述には他に見られない記述がある。その一部を以下に紹介する。

・・・そこでイバライ Ibarai とマンドウライ Mandulai は大いに怒り、「今やって来るや否やこんなことをする。これより後、我々を滅ぼそうとするのであるぞ。このアバガイ (=ウルス・ボラト Uluṣ bolad) を殺そう。ここで戦おう。」と言うとき、オルドス、ハルハタン Qarqatan のバイチュグル・ダルハン Bayicuγur darqan が言うには、「すべて皆で同意しあい〔使節を〕派遣して、『隷属の民 qaracu kümün は主人 ejen 無しでどうして暮らそうか。ハーンの後裔の一人を派遣せよ。』と言ったのに、ハンなるエジェン(主人の意、チンギスのこと)に悪いことをすれば、天なるエジェンは気に入るだろうか。」と諫めたけれども認めず、イバライとマンドウライをはじめ、冑を着て来るとき、(中略) オルドスのトゥメト・バヤンマラト Tümed bayanmalad という者がイバライの胸を射抜き、アバガイは〔敵の〕一人をほふるときに、〔敵の〕しんがりの者が〔ウルス・ボラトを〕射て殺害した。(ウルガ本, 63v-64r)

ここには先に紹介した例と同様にチンギス・ハーン家の一員に対する危害を諫めると共に、それをすれば「報いがくる」ことをにおわせる記述が見られる。これに対応するロ氏『アルタン・トプチ』の記述は以下のようである。

ウイグートのイバライ・タイシとオルドスのレグシ・アハラフ Legüsi aqalaqu の二人は戻ってきて見て、腹をたてて文句を言うには、「〔ウルス・ボラトは〕我らの政權を治めようとて来たのであるぞ。我らの首を治めようとて来たのであろうか。今から治者になるこのような者は今後誰を区別するだろうか。」といて兵が来て共に戦うときに、バガトゥル・クリスン Bayatur kürisün は自分の好い灰色の馬をアバガイに〔自ら〕下りて与えて乗らせて逃れさせた。神官 Ger-ün noyad たちが言った。「あなたの所で我らは死のう。」と逃れさせた。アバガイを白室に隠して戦い合った。〔イバライ・タイシらは〕神官たちを打ち負かしてアバガイを奪い取って殺害した。モンゴルジンのホソイ・タブン Qosoi tabunung のドゴラン公主 Doγolang günji なる姉は〔異変を〕聞いて来たけれども先に〔アバガイを〕殺された。公主はすべてのモンゴルジンの家に

喪礼をさせて喪に服させた。(Mostaert, 1952, II, pp. 170-71, Bira, 1990, 164a-b)

ロ氏『アルタン・トプチ』ではウルス・ボラト (アバガイ) が殺害された後に、それを悼んでモンゴルジン部が喪に服したという記述はあるが、『蒙古源流』のように、「天なるエジェンは気に入るだろうか。」という、ウルス・ボラトへの危害に対する強い拒絶的表現は見られない。

以上7項目について、『蒙古源流』と他の年代記との、同じ事件に関する部分の記述の比較を行った。すでにそれぞれのところで触れたように、『蒙古源流』にはボルジギン氏について、その「神聖」、「天命をもつもの」、「不可侵的存在」が繰り返し強調されている。ところが上に見たようにそのような表現はもっぱら『蒙古源流』だけにみられるものである。サガン・セチェンはそれを著すときに7種類の史料を利用したと記しているが(ウルガ本, 96v-97r)、それ以外にもオルドス地方に伝わった伝承をもとにしたことは言うまでもない。しかし他の年代記の記述から推測されるように、それらのもとの史料にこれほどボルジギン氏の不可侵性が記されていたとは思われない。このことはそのようなボルジギン氏の性格づけが、サガン・セチェンの心情から出たものであり、多くは彼自身が創作し書き加えたものであることを意味している。すなわちサガン・セチェンがこのように原文を「改作」した理由は、本章の中でもふれたように清朝のモンゴリア支配が浸透する中で、彼自身チンギス・ハーン家の一員として、歴史的過去の事件に仮託して、あらためてボルジギン氏族こそがモンゴルを支配する正当性を持っているのだ、と主張しようとしたことにある⁽²²⁾。

5. リグダン・ハーンの事績に対する評価

モンゴル最後の大ハーン、リグダン・ハーン Ligdan qayan (リングダン・ハーン Lingdan qayan) は1604年に即位したが、当時ハーンを称する王公たちは各地に存在し、モンゴリアは実質的に分裂状態にあった。リグダン・ハーンは分裂状態のモンゴリアの政治的統一を目指して活動したが、それは必然的に清朝(後金国)との対決に至り、最後は青海地方で計略の最中に天然痘に罹って死亡した。このリグダン・ハーンの死について、清朝の史料は異口同音に、第二代太宗が内モンゴル遠征を行ったため、リグダン・ハーンは逃れて、青海で死亡したのだとしている⁽²³⁾。いわばこれが公式見解である。しかしリグダン・ハーンが青海地方へ行ったのはカルマ派の応援のためで、太宗に追われたためでないことはすでに明らかにされている(山口, 1963)。他方、モンゴルの王公たちの多くはこのリグダン・ハーンによるモンゴル統一運動を支持はしなかった。清朝

の史料は清朝に帰順したモンゴル諸公の口を借りてその行動を一様に「不道」と非難している⁽²⁴⁾。

17世紀から18世紀において編纂されたモンゴル年代記は多かれ少なかれリグダン・ハーンの事績を記している。リグダン・ハーンが存在やその事績を記すことは決してタブーではなかったが、清朝との関係について書くことは慎重にならざるを得なかった。チャハル王家にシンパシーを持っていたサガン・セチェンも同様であった。すなわち彼はリグダン・ハーンの活動について次のように記している。

兄リンダン・バートル・タイジは壬辰(1592)年生まれ、その13歳の甲辰(1604)年にハンに即いて、フトウクトウ・ハーンとてあらゆる方向に有名になり、マイダリ法王やジョニ・チョルジらから深く繊細な秘密乗の灌頂などを受け、教えを崇めて、それからその26歳の丁巳(1617)年にサキャ・ブダクチャン・シャルバ・フトウクトウ *Saskiy-a bdaycan šarba qutuγ-tu* と出会い、また深き繊細な秘密乗の灌頂などを受けて、大宮殿金剛白城 *Yeke ordo qarsi vcir-tu cayan qota* というものを建て、その中に召釈迦牟尼を始めとする寺廟を多く建立し、一夏でただちに速やかに完成して、中の仏像などを完全に完成させて、先人の行ったように二法を等しくうち建てているうちに、五百年の濁世が近くなったために、六大国⁽²⁵⁾に散らばって住んでいたダヤン・ハーンの後裔、ハンたちの一族と黒骨 *qaraliγ* らの大いなる国人に、法からはずれる行為が多くなったときに、太平の政治により〔彼らを〕その力に従えることが出来ないで、例えば、昔の古い格言に、「ハーンが怒れば政権を破壊する。象が怒れば城を破壊する」と言ったように、ハーンの聡明な心に怒りが生まれたことにより、六大国を戦争の政治により集めて(治めて)、31年ハン位に座して、その43歳の甲戌(1634)年に定命が尽きてお亡くなりになった。(ウルガ本、68v)

サガン・セチェンの見解では、リグダン・ハーンが政権を失うきっかけは、まずモンゴルの貴族や平民たちに道をはずれた行為が多くなって、彼らを抑えることが出来なくなったこと、その結果「ハーンの心に怒りが生まれ」、モンゴルを「戦争の政治 *dayicing törö*」で治めることになったことによる。またその死も、「定命が尽きた」ためであった、とする。ここではリグダン・ハーンはあからさまに非難されてはいない。むしろ仏教の隆盛に力があったことを讃えてさえいるのである。しかしリグダン・ハーンと敵対した清朝の支配下にあったために、その事跡をより詳細に記すことや、個人的な評価を率直に記すことは出来なかった。

もちろんリグダン・ハーンのモンゴリア統一運動は、トゥ

メト王国やハラチン部などいくつかの集団を壊滅させ、またモンゴルの王侯に圧迫を加えたものであった。そのため多くのモンゴルの王侯が後金国政権に保護を求めたり、また外モンゴルの王侯の中にはロシアに援護を求める者も現れている⁽²⁶⁾。従って17世紀後半におけるモンゴル諸侯のリグダン・ハーンやチャハル政権に対する感情は依然良くなかったことが想像できる。それは後に起こったブルニ親王の反乱に際し、ブルニらの呼掛けにもかかわらず、同調したモンゴル諸侯が極端に少なかったことから明かである(森川、1983, pp. 118-19)。17世紀末もしくは18世紀初めに編纂されたとされる『シャラ・トゥージ』ではリグダン・ハーンについて『蒙古源流』とほぼ同じ記述がされている。

リンダン・バートル・タイジは辰年(1592)生まれ、その13歳のときにハーンになって、マイダリ法王、ジョイ・チョルジらから深き、繊細なる秘密乗の灌頂を受けて、教えを援護し、その26歳の時にサキャのシャルバ・ダガジン・フトウクトウ *Šarba dayajin qutuγ-tu* から深く繊細な秘密乗の灌頂を受けて、寺廟を建立して、仏像等を開眼して、クンガ・オエセル *Kungga oser* らが翻訳したものを集めてカンジュルをモンゴル語に翻訳し、*Lingdan qutuγ-tu sutu Cinggis dayiming secen jüg-üd-i teyin büged ilaγuyci bala zakravartu, dai tayisun tngri-yin tngri, delekei dakin-u qormusda altan kürdün-i orciγuluγci nom-un qayan* とて、二法を一層打ち建てているうちに、昔の行い(業)により、六万〔戸〕を、ハンとハラチュ(隸民)に法からはずれた行為が増大したことにより、平穩にすることが出来なくて、六大国を集めることが困難になり、31年ハン位に座して、西方に移動して、シラ・タラという地でその43歳のときにお亡くなりになった。(Shastina, 1957, pp. 75-76)

ここでもリグダン・ハーンが政権を失ったのは、モンゴルの人々の行状が正しくなかったことに起因するもので、彼自身の過失ではないとしている。なおリグダン・ハーンの称号は『蒙古源流』には記されていないが、いわゆるロ氏『アルタン・トプチ』に記されているものと基本的に同じである。

いわゆる『アルタン・トプチ』は、著者不明のものもロブサン・ダンジンのもも、リグダン・ハーンの仏教の普及活動以外にほとんどその事績を記していない。例えばロ氏『アルタン・トプチ』は以下の様である。

そのマングス・タイジの子はリンダン・フトウクトウ・ハーンである。リンダン・フトウクトウ・ハーンはその(彼に)付けられた名前は、*Sutu Cinggis dayiming secen, jüg-üd-i teyin büged ilaγuyci tayisun tngri*

-yin tngri delekei dakin-u qormusda altan kürdün -i orciyuluysan nom-un qayan (強力なチンギス大明賢者、全方の最勝者太宗、天の中の日、全世界の(全世界を治める)帝釈天、転法輪法王) という者になって、〔仏法の〕良いお言葉、法をモンゴル語に訳させて、大いに広めさせたのであった。(Nova II, p. 185. Bira, 1990, 172a)

リグダン・ハーンの称号については口氏『アルタン・トブチ』は重要な情報を伝えており、その称号から彼が目指した目標が推測される。ただしここではそのチベット仏教の弘法活動は高く評価されてはいるものの、その政治活動については評価どころか、何一つ記していない。

これがもう少し時代が経過して、リグダン・ハーンやチャハル王家の記憶も希薄になって来ると、その評価もかなり変わってくる。例えば1739年にダルマ・グオシ Dharma Guosi が著した『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲストゥ・ビチク (金輪千輻)』は、リグダン・ハーンの事績について、チベット仏教を保護し、一層隆盛をもたらしたという以外の、特に政治については、それ以前に著された年代記とはかなり異なった評価をしている。

・・・二人のソナムを始めとし300人のバートルによりその政権を護らせ、イデル・アルスラン Ider arslan とトゥルン・チダフ Tulun cidaqu をはじめとする大臣により政治を奉じさせ、世界に政権 (俗権) と教えを太陽のように庇護し捧げているあいだに昔の業の力、輪廻の法、時、政権の交替、高いところの最後は (一番高く上れば) 下ること、集まったものの最後は (集まったあとは) 散ることの道理となった故に、〔ハーンの〕心に悪魔が入って、自分の政権に鉄を振りかざし、自分の一族に〔対し〕刃物を持ち、行いは何をやっても誤り、真実の言葉を語ってもすべて非難し (非難の語となり)、その貴重な大いなる政権を樹立し〔たが〕すべての国たみを悲しませ、その平和な政権を〔揺り〕動かし、国たみを苦しめ、平和的に六万戸をいつくしみ (?) 治めることが出来ず、博学者、賢者らを欠点に入らせ (非難し?), 昔の善良な大臣を論破し散らして、ダギニ天、フトクタイを苦しめ乱暴にふるまって、自分の聖ラマを追い出して、仏法を捨てさせて、六万国と喜びのあるチャガン・ホタから出て、チベット〔へ〕ハルハのチョクトゥ Coytu と協力して黄教を根無しにしようと移動した。幸あるチャハル万戸の人々は望まなかったけれども時と政権の?力によりどうしようもなく共に従い、アルタン・ゲゲン・ハーン Altan gegen qayan の教えと政権を粉々にし、黄河を渡ってシラ・タラという所まで事情は無く (途中の事情は不明であるが)、その43歳のとき、明国の崇禎帝

Suvacing qayan の第7年の乙巳年にシラ・タラでお亡くなりになった。(Coyji, 1987, pp. 149-50)

この『アルタン・クルドゥン』のリグダン・ハーンの仕事に対する評価は、彼が最後はカルマ派を支持したために、それに対抗していた黄教、すなわちゲールグ派の立場からの批判が見られるが、基本的にリグダン・ハーンの仕事に対する批判が目につく。1775年にバーリン部のラシプンスク Rasipungsuγ が著した『ボロル・エリヘ (大元国の水晶珠 Dai Yuan ulus-un Bolor erike)』は著者自身、その著作の中に『アルタン・クルドゥン』を参考にしたと記しているが、このリグダン・ハーンについてもそれを参照しているが、少し異なる部分もある。

そのように〔仏の〕教えと政治をやるべき通りに行つて暮らすうちに、ハーンは欲望と楽しみ (悦楽) に次第にふけて、政治と法を破壊し、租税を多くして、そのあらゆる民を悲しませ (苦しませ)、行いは何を行つても誤り、真実の正しい言葉は、何を語つても非難となり、学者、賢者を追い払って、宝石のごとき教えを破壊させたことにより、国の政治は乱れて、ハルハとホルチンなどはハーンから背いて、互いに分かれ、それぞれ自分の意志でハーンという称号を共に推戴しあつて、〔リグダン・〕ハーンと対抗したことにより、甲戌、その第31年に、ハーンは窮乏して、それからチベット国を支配しようと、チャハルの者たちを連れ、移動してシャラ・タラという名の地に到着して、ハーンはご病気になってお亡くなりになった。(Mostaert, 1959, Part III, pp. 171-72)

このように『ボロル・エリヘ』においてはリグダン・ハーンに対する評価は、基本的に『アルタン・クルドゥン』と同じであり、いずれにせよそれ以前に編纂された年代記と比較するとかなり酷評と言わざるを得ない。すなわち以前の年代記では、モンゴルの政治が乱れ、政権を失ったそのもととの原因は、モンゴルの王公や一般の牧民であったとしているのに対し、グオシ・ダルマやラシプンスクはそれがすべてリグダン・ハーン自身の失政に起因していると主張している。この考え方は上にも示したように、清朝の文献でリグダン・ハーンの実行を「不道 yosun ügei」としているものと軌を一にするものである。このことは一つにはチャハル王家が滅びてかなりの年月が経過しており、もはやチャハル王家に対する記憶も薄れていたとともに、清朝のリグダン・ハーンに対する公式的評価がすでに浸透したことを示すものであろう。

以上示したように、種々のモンゴル年代記の、リグダン・ハーンに関する記述を比較してみると、時代によってその評価が大きく変わっていることが分かる。サガン・セチェンの書き方は、後の時代に編纂された年代記に比べると、

リグダン・ハーンを直接的に批判するようなことはしていない。それはチャハル王家にシンパシーを持ち、かつてはリグダン・ハーンと行動を共にしたオルドス王家の一員であったとされるサガン・セチェンにとって、リグダン・ハーンの事績をあからさまに批判することは出来なかったからであろう。

6. おわりに

以上、「印、蔵、蒙同源説」、チンギス・ハーンの中国支配、ボルジギンの天命説、リグダン・ハーンの評価など、『蒙古源流』と他の年代記の記述を比較してその相違を明かにし、それを根拠にサガン・セチェンの『蒙古源流』の著作の動機の一側面について検討した。冒頭にも示したように、サガン・セチェン自身、『蒙古源流』を記す動機を明確に示していて、それはあたかもインドに発生した仏教がチベットを経てモンゴルに伝わり、そこでいかに隆盛したかを語る、ということが目的のように見える。それとともにいわゆるオルドス部の一員としてサガン・セチェンは、ダヤン・ハーン以来のオルドス部の歴史、家系にも多くの注意を払い、とりわけその曾祖父フトウクタイ・セチェン・ホンタイジの事績は誇りをもって記している。

しかしやはり彼が強い関心をもって記したのは自身の所属したチンギス・ハーン家のモンゴル支配の歴史である。その著作の中で、彼はすでに先人によって唱えられていた「印、蔵、蒙同源説」を利用し、チンギス・ハーン家の権威を高めたり、またボルジギン氏の天命説や不可侵説を随所に示して、チンギス・ハーン家があくまでモンゴルの主権者であることを強く主張したのである。すなわち、サガン・セチェンが『蒙古源流』を著した重要な目的は、モンゴルの真の主権者はボルジギン氏であることをあらためて主張し、その新たな再生を求めようとしたことにある。その意味で彼がこの著作を単にチンギス・ハーン家の歴史的過去を回顧するために著わしたのではないことは明らかである。周知のように『蒙古源流』の写本は、現在きわめて多く存在している⁽²⁷⁾。それはサガン・セチェンの記述態度が清朝支配下のモンゴル王侯たちの多くの共感と呼んだからに他ならないのである。


注

- (1) 『蒙古源流』の編纂年代についてはその奥書に記されているものに基づいているが、ただしそれによると1685年という年になる。しかし1662年とすべきについては、江実(1940, pp. 72-76)による。
- (2) 同じことは奥書の始めにおいて繰り返されている。「このように最初守護者たる器世界、種々それに頼るものである種衆生、

インドの共戴帝より以来、現在の末世に至るまで衆生のために、聖なる力もつ者であるハンたちが生まれて世界を平かにし、功德あるものである菩薩らが生まれて衆生を導いて、仏の教えの道によりすべてを楽しませたことを、すべて語ることとは出来ない〔故に〕あれこれ簡略に〔記した。〕」(ウルガ本, 96v) なお『蒙古源流』の多くのテキストの中で最良のテキストは通称「ウルガ本 Urga-Handschrift (庫倫本)」と称される、モンゴル国立図書館所蔵の写本である(Haenisch, 1955)。以下本文では『蒙古源流』を引用する場合特に指定する以外は、「ウルガ本」に基づく。

- (3) このことはオルドス王家の事績に関して、バルス・ボラトの長子グン・ビリク・メルゲン・ジノンの子孫の系譜が詳細に記されている他、(ウルガ本, 69r, 73r-74r), アルタン・ハーンやダライ・ラマ3世のモンゴルへのチベット仏教の導入、グン・ビリク・メルゲン・ジノンの活動、フトウクタイ・セチェン・ホン・タイジの活動など、16世紀後半から17世紀前半におけるオルドス王家の成員の活躍が、『蒙古源流』の後半部で特に明確に記述されていることから明らかである(ウルガ本, 69r-91v)。
- (4) 以下ロブサン・ダンジン『アルタン・トブチ』をロ氏『アルタン・トブチ』と略称する。
- (5) 『フウランテプテル』では原註に「シャルウワのチョエジュンの中に、〔その最初の人君を〕インドのヴァトサラ王のウダヤナの子ニャチ・ツェンボとして述べているとし、そのチョエジュンに注して、ブトン仏教史を指すのであろうとされている。(稲葉, 佐藤, 1964, p. 104, 注18)
- (6) すなわち『シャラ・トゥージ』と『ジャラグスン・フリム』は『蒙古源流』と同じく、『アサラクチ史』は『アルタン・トブチ』と同系統である。
- (7) 著者はオルドス、ジュンガル旗出身の Ye shes dpal ldan (耶喜巴勒登)で、チベット語の原書名は Hor gyi yul du rgyal rabs dang rgyal bston bston hdzin yig dgon sdre sogs zi ltar hbyung tsul bzhugs (述説蒙古地区汗統, 仏教, 高僧, 文字創制諸源流之宝鬘)である。1835年の著作という。(蘇魯格, 1989, p. 1)
- (8) 原タイトルは rGyal-rabs rnams-kyi byung-tsul gsal-ba'i melong chos-'byung である(Yamaguchi, 1970, pp. 157-158)。また森川, 1990, p. 506参照。
- (9) これは中国の学会では『本義必要経』と訳している。内蒙古社会科学院に別な写本があり、そのタイトルは Ciqula kereglegci tegüs utyatu šastir といい、『必要全義篇』の訳が付けられている(周清澍, 額爾特尼・巴雅爾, 1981, p. 170)。
- (10) 森川, 1987, p. 56ならびに珠榮嘎, 1991, pp. 3-5参照。通称『アルタン・ハーン伝』にはチベットの王統に関する記述は見られない。
- (11) 著者不明『アルタン・トブチ』は、ボルテ・チノア Börte cinu-a からの系譜を記す中で、「その子トラガルジン・バヤン Torayaljin bayan はボロクチン・ゴア Boroycin you-a という妻を持っていた。」と記した後、「モンゴルのハンらの尊きものの最初はチンギス・ハーン、その子オゲデイ・ハーン」と記して歴代のハーンの系譜を記し、その最後に「その弟はアブナイ親王、その子はブラン(ブルニ)親王, 42代目。」と記し、その後上の子トラガルジン・バヤンにつながる系譜である「ドワ・ソホル, ドブ・メルゲンという二人の子がある。」として、以下チンギス・ハーンに至る伝説的な祖先の系譜を記している(pp. 5-7)。ここでチンギス・ハーンからブルニ親王までの系譜が記されているのは、後人の挿入と考えるのはごく当然のことである。ただしそれが本当に後人の挿入であるかは、より古い『アルタン・トブチ』の写本があつて

こそ言えることである。

- (12) いわゆるゴムボエフ本 (Gomboev, 1858, text, p. 4) にも『喀喇沁本蒙古源流』(藤岡, 1940, 蒙古源流, 貳, p. 2) にもこのモンゴルの王統の記述が見られない。
- (13) ハイシット(田中克彦訳), 1967, pp. 150-168. 文献上リグダン・ハーンの命により1628-29年にカンジュルがモンゴル語訳されたこととされていることに疑問を抱き、すでに翻訳されていたものにリグダン・ハーンが自分の名をはめ込んだのではないかと述べている。いずれにせよ17世紀前半にはカンジュルのモンゴル語訳が完成していたことは間違いない。
- (14) 道潤梯歩 (1981, p. 142) はこの文の kitad-un altan qayan を「契丹之阿勒坦合罕」と訳している。kitad は「中国」もしくは「漢」とすべきで、「契丹」と訳するのは、歴史的事実からしても間違っている。
- (15) kurgeju は正しくは kürgejü であるが、殿版は  と刻している。
- (16) 『元朝秘史』第42節、ボドンチャルがボルジギン氏族となったと記されている所だけである (村上, 1970, p.)。
- (17) jayaγ-a-tu は tengri-dece jayaγ-a-tu (天からの命のある) と同じ意味である。もちろん「天命」思想は中国の古来の政治哲学の基本理念であるが、それとの関係はここでは論じない。
- (18) 彼が『アルタン・トブチ』などに見えるアダイ・タイジ (アダイ・ハーン Adai qayan) と同一人物であることがすでに指摘されている (岡田, 1966, p. 17)。
- (19) 和田清, 1959, pp. 333-342. 『明英宗実録』巻232, 景泰4年8月甲午に、脱脱不花 (タイスン・ハーン) が沙不丹に殺害されたことが報告されている。(『明代満蒙史料—蒙古篇』, 巻3, p. 481)
- (20) 『シャラ・トゥージ』の記述はほとんど中身が無い。すなわち次のようである。
そのうちタイスン・ハーンをチャプタンが殺害したときに、自分の娘の子であったと殺さなかったモロン・タイジ Molon tayiji を、チャプタンが死んだ後、オンニグートのムリハイ王 Muliqai ong は、モロンが17歳の時にハン位に即けた。(Shastina, 1957, p. 68)
- (21) この他にマンドゥグリ・ハーンがはじめてバヤン・モンケと会見したときのこととして『蒙古源流』は次のように記す。それから従兄弟のバヤン・モンケ・タイジ Bayan möngke tayiji とシキル・ピージ Sikir bijii を先の大官と実家の父であるオロチュ・シグシテイが届けてきたときに、叔父 ebin abay-a のマンドゥグルン・ハーンは大層喜んで、ただちに「ボルジギンの後裔の根源 Borjigin-u ür-e-yin könörge となるがよい。」とおっしゃり、バヤン・モンケをボルフ・ジノン Bolqu jinong と名付けて、…… (ウルガ本, 60v)
このボルフ・ジノンはいわゆるダヤン・ハーンの子孫から出自することになったから、ボルフ・ジノンに対し「ボルジギンの後裔の根源」とする表現は決して大げさなものではない。他方ロ氏『アルタン・トブチ』など他の年代記にはこのようなバヤン・モンケがマンドゥグリ・ハーンのもとに届けられたというような記述や、マンドゥグリ・ハーンがバヤン・モンケを「ボルジギンの後裔の根源」と呼んだというような記述は見られない。
- (22) 『蒙古通史』中巻, 第七章, 第一節, 二「社会思想」(pp. 597-600) で、14-17世紀のモンゴルにおける「天授汗権」の問題が論じられている。この項の著者はその議論の根拠を示していないが、基本的に『蒙古源流』の記述によっていることは明かである。本節でも明らかにしているように、『蒙古源流』以外

の年代記には「天命説」や「天授汗権」説はあまり記されておらず、この思想がこの時代のモンゴルの基本的政治思想として受け入れられていたかについては再考の余地がある。

- (23) 『大清太宗文皇帝実録』, 巻11-12, 天聰6年4月-6月の各条, 並びに同, 巻20, 天聰8年閏8月庚寅の条他。
『皇朝藩部要略』, 巻1, 内蒙古要略1, 13a-13b, 20b.
- (24) 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻23, 喀喇沁部総伝。同, 巻26, 敖漢部総伝。同, 巻31, 翁牛特部総伝, ほか。
『蒙古遊牧記』巻3, 奈曼部の項。
- (25) 「六大国 Jiryγyan yeke ulus」とは「六万戸大モンゴル国 Jiryγyan tümen yeke mongγol ulus」の省略である (森川, 1972)。
- (26) 例えば1631年10月28日から12月25日までの箇条書きにした上表文でトムスクの司令官タチーフ Tatev はモンゴル北西部にあったアルティン・ツァーリ (アルタン・ハーン) の使節, バイガル・バイサエフ・バクシ Bajgal Bajsaeв bagsi から得た情報として, アルティン・ツァーリが Chagir-kan, すなわちチャハル・ハーン (リグダンのこと) から防衛しなければならない, 等のことが伝えられたと報告している。(AN SSSR, 1957, p. 163)
- (27) 『蒙古源流』の写本の状況については森川 (1995) 参照。

参考文献

- anonymous, 1925: *Cinggis qayan-u cadig* (著者不明『アルタン・トブチ』), 蒙文書社, 北京。
- AN SSSR, 1957: *Materialy po istorii Russko-Mongol'skikh otnoshenij 1607-1636*, Moskva.
- 包文漢・喬吉, 1994: 『蒙古歴史文献概述』, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特。
- Bawden, C.R. 1955: *The Mongolian chronicle, Altan Tobči*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Bira, Sh. (ed.), 1990: *Altan Tobci, "The Golden summary which relates briefly the deeds of civil governing established by ancient emperors" (The Mongol chronicle of the 17th century)*, Ulaanbaatar, 1990.
- 陳寅恪, 1931: 「彰所知論与蒙古源流」, 『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』 Vol. 2-3, pp. 302-309.
- Coyiji (ed.), 1987: *Dharm-a; Altan kürdün mingγan kegesüiti* 『アルタン・クルドゥン』, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特。
- 道潤梯歩, 1981: 『新訳校注『蒙古源流』』, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特。
- 藤岡勝二, 1940: 『羅馬字転写日本語対訳, 喀喇沁本蒙古源流』, 文求堂, 東京。
- 外務省調査部三課, 1939: 『アルタン・トブチ (蒙古年代記)』, 東京。
- 江 実, 1940: 『蒙古源流』, 弘文堂, 京都。
- Gomboev, G., 1858: *Altan-tobchi, mongol'skaya letopis'*. St. Petersburg.
- 郭和卿 (訳), 1985: 廓諾・迅魯伯著『青史』, 西藏人民出版社, 拉萨。
- Haenisch, E., 1955: *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen)* (ウルガ本), Akademi Verlag, Berlin.
- Haenisch, E., 1959: *Der Kienlung-druck des mongolischen Geschichtswerks Erdeni Yin Tobci von Sagang Secen* (殿版), Franz Steiner Verlag GMBH, Wiesbaden.

- Haenisch, E., 1967 : *Qad-un Ündüsün-ü Erdeni-yin Tobčiy-a* (Eine Pekinger Palasthandschrift) (故宮抄本), Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Heissig, W. (ed.), 1958 : *Altan kürdün mingyan gesesütü bilig. Eine mongolische Chronik von Siregetu guosi dharma* (1739), Ejnar Munksgaard, Kopenhagen.
- Heissig, W., 1959 : *Die Familien- und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen I*, 16-17 Jahrhundert. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- ハイシッヒ (田中克彦訳), 1967 : 『モンゴルの歴史と文化』, 岩波書店, 東京.
- 稲葉正就, 佐藤長, 1964 : 『フウランテプテル』, 法蔵館, 京都.
- 珠栄嘎, 1991 : 『阿勒坦汗伝』, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特.
- 小林高四郎訳註, 1941 : 『蒙古黄金史』, 生活社, 東京.
- 京都大学文学部『明代滿蒙史料—蒙古篇』1-18巻, 京都大学文学部, 1954-59, 京都.
- Mostaert, A., 1952 : *Altan Tobči, A Brief History of the Mongols by bLo·bzan bsTan·jin* (ロブサン・ダンジン『アルタン・トブチ』), Harvard University Press, Cambridge.
- Mostaert, A., 1956 : *Erdeni-yin Tobči, Mongolian Chronicle. Part I*, Harvard University Press, Cambridge.
- Mostaert, A., 1959 : *Bolor Erihe, Mongolian Chronicle by Rasipungsuy* 『ボロル・エルヘ』. Part I-V. Harvard University Press, Cambridge.
- 森川哲雄, 1972 : 「中期モンゴルのトゥメンについて」, 『史学雑誌』81-1, pp. 32-54.
- 森川哲雄, 1983 : 「チャハルのブルニ親王の乱をめぐる」, 『東洋学報』64-1・2, pp. 99-129.
- 森川哲雄, 1987 : 『アルタン・ハーン伝の研究』, 福岡.
- 森川哲雄, 1990a : 「オルドス部の清朝帰順をめぐる」, 『歴史学・地理学年報』14, pp. 49-72.
- 森川哲雄, 1990b : 「『蒙古源流』殿版系諸本に関する諸問題について」, 『布目潮瀨博士古稀記念論集』, 汲古書院, pp. 499-523.
- 森川哲雄, 1995 : 「『蒙古源流』の写本とその系統について」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』, 50号, 東京外大AA研, pp. 1-41.
- 村上正二, 1970 : 『モンゴル秘史 I』, 平凡社, 東京.
- 内蒙古社科院歴史所《蒙古通史》編写組, 1991 : 『蒙古通史』上, 中, 下. 民族出版社, 北京.
- 岡田英弘, 1965 : 「ダヤン・ハガンの年代 (上)」, 『東洋学報』48-3, pp. 1-26.
- 岡田英弘, 「1966 : ダヤン・ハガンの先世」, 『史学雑誌』75-8, pp. 1-38.
- 岡田英弘, 1992 : 『世界史の誕生』, 筑摩書房, 東京.
- Peringlei (ed.), 1960 : *Byams-ba; Asarayči neretü-yin teüke* (『アサラクチ史』), Erdem shinjilgeenij kheblekh ujlber, Ulaanbaatar.
- Roerich, G.N., 1949 : *The Blue Annals*. Motilal Banaarsidass, Calcutta.
- Sayang secen, 1662, : *Tngir-dece jayayabar egiüdügsen qad-un altan uruy Cayan teüke neretü tuyuji bolai* (『白い歴史』), ウランバートル国立図書館蔵, 抄本.
- 蘇魯格 (訳註), 1989 : (清) 耶喜巴勒登著『蒙古政教史』, 民族出版社, 北京.
- Shastina, (ed.) 1957 : *Shara tuyuji, mongol'skaya letopis' XVII veka*. M-L.
- 和田清, 1959 : 『東亞史研究—蒙古篇』, 東洋文庫, 東京.
- 王德恩, 1985a : 「《蒙古源流》著者思想剖析」, 『蒙古族哲学思想史研究』内蒙古社会科学雜誌社, pp. 60-67.
- 王德恩, 1985b : 「《蒙古源流》研究三題」, 『蒙古族哲学思想史研究』, 内蒙古社会科学雜誌社, pp.68-72.
- 王堯, 鎮謙 (訳註), 1983 : 『敦煌吐蕃文獻選』, 四川民族出版社, 成都.
- 山口瑞鳳, 1963 : 「顧実汗のチベット支配に至る経緯」, 『岩井博士古稀記念論文集』, 東京. pp. 741-773.
- Yamaguchi, Z., 1970 : *Catalogue of the Toyo Bunko collection of Tibetan works on History*. Toyo Bunko, Tokyo.
- 周清澍, 額爾德尼・巴雅爾, 1981 : 「《蒙古源流》初探」, 『民族史論叢』, 吉林人民出版社, pp. 145-182.
- 朱風, 賈敬顔訳, 1985 : 『漢訳蒙古黄金史綱』, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特.
- 張廷玉撰『明史』, 中華書局, 北京, 1974.
- 『大清太宗文皇帝実録』, 新文豊出版公司, 台北, 1978.
- 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』, 李桓輯録『国朝耨類微初編』所収, 文友書店, 台北,
- 祁韻士 : 『皇朝藩部要略』, 中国边疆叢書所収, 台湾文海出版社, 台北, 1965.
- 張穆 : 『蒙古遊牧記』中国边疆叢書所収, 台湾文海出版社, 台北, 1965.